

【分科会】

自然と社会の民族誌：動物と人間の連続性

【代表者】

田所聖志・奥野克己

自然と社会の民族誌：動物と人間の連続性

田所聖志 (東京大学)

動物は自然で、人間は社会か？：存在論からのアプローチ

近藤祉秋 (早稲田大学大学院)

「自然」と「文化」の境界面：神経生理学研究室の事例検討

池田光穂 (大阪大学コミュニケーションデザイン・センター)

ボルネオ島狩猟民ブナン社会における動物と人間：近接の禁止と魂の連続性

奥野克己 (桜美林大学)

聖なる動物が解き明かす自然と人間の関係

シンジルト (熊本大学文学部)

人間と魚の連続性：パプアニューギニア・テワータにおけるウナギ漁の事例から

田所聖志 (東京大学)

コメンテーター

春日直樹 (大阪大学)

自然と社会の民族誌

動物と人間の連続性

田所聖志（東京大学）

17世紀の近代科学の黎明期に、それまでは自然のなかにあるとされていた諸性質が自然から分断され、人間の精神の側に帰属させられるようになった。自然は、目的合理性をもたない、死せるマテリアとなったのである。こうして、自然を人間の外なる存在とする自然と社会の二元論が生まれた。

この自然と社会の二元論は、西洋哲学に、より強く人間の精神思考の枠組みを問うことへの根拠を与えるようになった。だからこそ、今日の西洋哲学には、精神を有する存在は人間だけであり、動物や植物や人工物や精霊といった人間以外の存在との間には質的な断絶があるとする考え方、すなわち、人間と非人間の間の非連続性を強調する傾向がある。

他方、20世紀後半の自然科学の進展は、このような西洋哲学の人間観に対して新たな問題を提起しようとしてきた。人間と他の霊長類との類似性を示した霊長類学、ロボットに自意識や理性や想像力や道徳的感情をもたせようとする人工知能研究、ゲノム解析によって人間と他の生物との遺伝子レベルの共通性を解明した遺伝子研究などは、人間と非人間が本質的に同じであると主張することで、両者の間の境界をぼやかし、それらに連続性を見出す眼差しを打ち立てようとしている。

非人間と人間の峻別といった、自然と社会の二元論思考の内包する問題が指摘されたのは19世紀末であり、決して新しくはない。しかしながら、そうした二元論への信念は、簡単に乗り越えることができないほど根深かったのである。人間は精神を有する点で、あくまでも動物などの非人間とは本質的に異なるとされていたからである。

現在、注目すべき取り組みが、生態心理学においてすでに始まっている。アフオーダンスという知の組み換えをつうじて、わたしたちを取り巻く環境の記述が試みられているのである。生態心理学は、自然と社会をめぐる非連続性に基づく従来の二元論思考において注意が向けられなかった、隙間や穴といった環境の存在論に注目し、自然と社会の連続性のもとに現れる日常の生態を描き出そうとしている。

近年、人類学でも、自然と社会の非連続性とは異なるコスモロジーをもつ人々の民族誌を描き出すことをとおし、西洋の二元論思考が抱える難題に挑戦する研究者たちがいる。デスコーラによれば、南米・アマゾンニアのアシユアル社会は、人間と動植物が同じ規則に従う「自然の社会」であり、そこでは、西洋において自明的に想定されるような人間、動植物、精霊などの明確な弁別がなされないという。ヴィヴェイロス・デ・カストロは、アメリカ先住民の存在論では、人間と非人間は、一方で、諸存在が互いに異なる身体をもつという形而下の非連続性によって、他方では、諸存在が互いに意思疎通が可能であるという形而上の連続性によって結びついていると述べている。このような民族誌的研究をつうじて、人間と非人間、自然と社会の構成要素が緩やかに連続し、和合している状況が明らかにされてきている。

本分科会では、自然と社会の二元論を乗り越える試みをさらに発展させるため、こうした理論検討と民族誌記述を手がかりとして、文化人類学の観点から、自然と社会の非連続性と連続性をめぐる問題提起を行う。取り上げる内容は以下の通りである。

民族誌的な存在論の可能性と意義に関する理論的考察（近藤）

日本の神経生理学教室の実験室でなされる研究活動に内在化された自然と文化の二元論をめぐる問題の検討（池田）

ボルネオ島の狩猟民における人間と動物の魂の連続性をめぐる民族誌（奥野）

チベット仏教社会において動物個体に対して行われるツェタル儀礼に見られる自然と文化の連続性をめぐる考察（シンジルト）

ニューギニア農耕民の内水面漁撈の技術から見える魚への人間性の拡張（田所）

自然や環境、生態をめぐる人類学的研究の多くは、幾つかの例外を除き、自然と社会の二元論に基づく視点からなされていた。それに対して、本分科会が目指すのは、デスコーラが取り組むような、諸存在をめぐる諸関係のなかから立ち現れるような「諸関係の一般生態学」への展開への意識である。本分科会では、自然と社会を取り扱うために、文化人類学が主題とすべき問題を再定義し、自然や環境や生態を語るこれまでにない視点を提起したい。

動物は自然で、人間は社会か？

存在論からのアプローチ

近藤祉秋（早稲田大学大学院）

理性を持つとされる「人間」は「社会」を築き、他方で動植物をはじめとする「非人間」は「自然」という範疇に属して理性による探求および操作の対象となる、というような考え方こそが本分科会で批判的に検討する自然と社会の二元論である。これがデカルトの物心二元論のように、西洋思想史の流れを汲みながら、西洋近代社会における重要なテーゼとして確立されており、現在でも「自然保護思想」のような形で体现されている。

これまで西洋中心主義的な諸概念を持つ狭量さを指摘して、多様性を前提としたより深い人間の理解を目指してきた人類学でさえもその学実践を行う上で、自然と社会の二元論を再生産してきたことは否めない。たとえば、動植物、気象現象、鉱物などを含む非人間に対して「自然」というカテゴリーを用いない社会を研究する際にも、「対象となる社会では自然に属する存在（例えばクマなどの動物）が社会化されている」といった分析をすることにより、結局自然と社会の二元論を再生産してしまっている場合が多い。

他の例では、「自然はもともと連続性を持つ存在であるが、言語を媒介にして人間はそれに非連続性を導入する」というような見解である。言語が対象を認識する上で大きな役割を担うという理解そのものはおそらく妥当である。しかし、そこに自然を主体としてではなく、ただの対象物としか見ないという二元論的前提が潜んでいることは改めて指摘されなければならない。

ある時期からの西洋思想が前提としてきた、働きかける主体としての社会＝理性と働きかけられる客体としての自然＝物体という二元論に関して必ずしも理論的な批判がなかったわけではない。しかし、このような二元論がいまだに西洋近代社会に生きる（人類学者を含む）人々にとって有効なスキーマとして存在しているのはなぜなのだろうか？この二元論を乗り越えることはできるのだろうか？できるとしたら、どのような方法を用いて、そしてそのような二元論の超克にどのような意義があるのか？自然と社会の二元論というスキーマを使わずに動物と人間の関係を記述する方法はあるのか？以上の疑問に対する一つの試みとして、本発表では「存在論」概念を利用する先行研究をもとに自然と社会の関係性を再考したい。

というのも、自然と社会の二元論を前提とした人類学的研究が支配的ななかで、一部の研究者の間で非二元論的な理論を構築しようとする動きがあり、二元論を超克するための有力なキーワードの一つとして「存在論」を用いる者が増えているからだ。たとえば、フィリップ・デスコーラは人間が自身を含む「人間」とそれに属さない「非人間」との間の境界を設定するとき用いる「同定の様式」について議論している。彼は主に取り上げた諸様式（アニミズム、自然主義、トーテミズム、類推主義）を「存在論」という言葉を用いて定義しなおしている。また、エデュアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロも、西洋の思考様式とアメリカ先住民のそれとを比較するとき両者を「存在論」として扱っている。

ヴィヴェイロス・デ・カストロの議論を引き継ぐ形で、マリオ・プレーサーは「伝統的な生態学的知識」をめぐる先住民と環境NGOとの相互不理解の現状を指摘している。彼によれば、このような不和の原因として非先住民の側に先住民の知識を「認識論」として扱う態度が根底にあり、真の意味で相互理解を達成するにはそれを「存在論」として扱う必要があると主張している。「存在論的遭遇」とは、異なる存在論同士（たとえば西洋近代人が有するとされる「自然主義」とアメリカ先住民などが持つ「アニミズム」）が遭遇する場に着目することの重要性を指摘する概念である。

本発表ではこれまでの自然と社会の二元論に関する研究のうちで上に挙げたような「存在論」のアプローチを採る研究を概括した上で、新しい視点（非二元論）を獲得するための一つの提案として「存在論」のアプローチが持つ可能性について考察する。動物と人間との関係における非二元論的理解を目指す本分科会のなかで本発表は議論の「たたき台」として位置づけることができる。自然と社会の二元論を超克するための理論的検討に専念する本発表に続いて、動物と人間の関係をめぐる実証的な研究によって本発表での方向性は補足され、かつより深く検証されることになる。

【 認識論 / 存在論、二元論 / 非二元論、存在論的遭遇、自然主義、アニミズム 】

「自然」と「文化」の境界面

神経生理学研究室の事例検討

池田光穂 (大阪大学コミュニケーションデザイン・センター)

この発表では、我が国の大学における、ある神経生理学研究室の構成員たちが考え、取り扱う「自然」について考察する。演者が着目したい点は、(1)動物を対象にする神経生理学者が研究的生活(Laboratory life)の中で意識する「自然」の概念と、(2)それが日々の実践にもたらすもの、さらには(3)その実践を通して「自然」の概念が維持され再構成されるに際しみられる具体的な諸相である。それらのことを、視覚情報の脳内での神経学的処理機構について実験動物を使って研究する実験室や研究室での出来事の観察と関係者へのインタビューなどの調査資料から検討する。

視覚情報処理に関する神経生理学の研究は、感覚生理学や脳科学研究領域のなかでも歴史が長く、またその研究成果の蓄積が豊かな領域である。また方法論における刷新や実験データの統計解析などの手法が洗練され極めて詳細な研究が進んでいるのが現状である。それに対して「なまもの」である実験動物の飼育と管理、さらには生理学実験下における麻酔動物の管理には、科学的な実験技法の洗練さとは好対照の経験的知識や経験知による試行錯誤が繰り返されている。

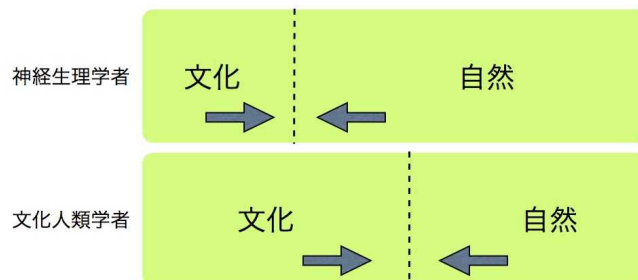
私たちの予断とは異なり神経生理学者は実験動物を目的理性を持たぬマテリアルとしては取り扱わず、動物にも人格的個性を認めている。にもかかわらず実験状況においては、動物は脊椎動物亜門哺乳類が共有する神経細胞の普遍的性質があるものとして理解され、情報処理の神経回路には進化的に説明可能な論理を有しながらも、実験者の影響を完全に排除できる観察対象(=実験動物)の独自性が信じられている。

そこでは実験データの性質(nature)を、普遍的自然としての「意味のあるデータ」と人工物(artifact)としての「意味のないデータ」(ノイズ)を峻別する経験上の基準があると信じており、また実験データの客観性を保証する論証的手続きがあると主張される。にもかかわらず動物を使った実験が失敗した際には、客観的根拠があるはずの失敗をその直接的理由を探究することなしに、[まず]実験データを得る[次に「良いデータ」を得る]という目的理性を優先させて、まったくアバウトな試行錯誤にもとづく思考実験にもとづいて人為的な操作(=文化的実践)を通してこの種の失敗を克服しようとする。

では神経生理学者が考える「自然」とはいかなるものであろうか。フィールドと実験室を往還する生態学者たちがしばしば「自然」という用語を多用するのみならず自らの多くを自然主義者(naturalists)と呼ぶのに対して、実験生物学者たちの日常語彙の中に「自然」が登場することは希である。この2つの研究領域における対比は、日本と欧米のそれぞれの文化がもたらす自然/Natureという語義の対立よりも強いコントラストがあるように思える。つまり自然と文化、自然と社会という用語と概念を、我が文化での分析に持ち込む際に、現地語による語用論や語の隠喩について細心の注意を払うべきことを示唆する。

以上のことを踏まえて冒頭の論点に暫定的見解を与えるとするならば次のようになる：(1)彼らは神経細胞という自然の摂理の研究に従事しているが、その知的活動を文化的なものとしては自覚していない、

(2)文化人類学者は、神経生理学者の活動を文化的知恵を産出する実践と見て、そして(3)神経生理学者と文化人類学者は、ともに自然と文化の二分法的秩序のなかを生活しているが、自然と文化の両者の境界面(インターフェイス)では、この二分法の関係が緊張関係をもって互いの領域を押し戻すような圧力があることがそれぞれ示唆される。



【図1】神経生理学者は動物実験の失敗を克服する自分たちの作業を文化的知恵を産出する活動だとは思わないが、文化人類学者は彼らの活動のなかに文化的実践を読み取ろうとする。

【自然と文化、実験室、民族誌、動物実験、科学人類学】

ボルネオ島狩猟民ブナン社会における動物と人間

近接の禁止と魂の連続性

奥野克巳（桜美林大学）

西洋において、プラトンのイデア論を出発点として、17世紀の機械論的な自然観の成立を経て、自然は、所産的なものとして扱われるようになり、さらに、人間が、自らに役立てるように自然を支配するという図式が確立された。そのようにして、人間は、動物に対する一方的な生殺与奪の根拠を手に入れたのである。その後、動物を殺生する人間の態度を省みることなしに行われる、動物に対する生殺与奪の形式が世界中に拡張され、他方で、動物に対する愛護・保護思想が広く行き渡るようになった。

これに対して、「伝統的」な日本人の自然観は、そうした西洋流の思考とは相容れない。ここでは、長らく、自然は統御すべき対象ではなく、畏敬すべき対象であると考えられてきた。動物に対しては、それを殺生しなければ生きてゆくことができない人間の宿命を認めながら、動物にも魂があると捉え、犠牲となつてくれる動物に対して共感と憐れみを抱き、（その魂）を慰撫したり、感謝を捧げたりしてきた。日本国内のあちこちに見出される獣魂碑や鳥獣供養塔の類は、そのような伝統的な日本人の動物観の表れである。

本発表で取り上げる、マレーシア・サラワク州(ボルネオ島)ブラガ川沿いの、人口約500人の狩猟民ブナンは、そうした西洋とも日本とも異なる動物との関わり方を発達させてきた。その点を民族誌に基づいて記述することを踏まえて、自然と社会のあり方について再検討することが、本発表の中心課題である。

ブナンは、焼畑稲作を部分的に取り入れながら、今日にいたるまで、主に、周辺の熱帯雨林に生息する動物の狩猟によって、暮らしを組み立ててきている。彼らは、動物の殺生に対して、何ら儀礼的手続きを行うことはない。動物（の魂）に対して感謝や慰霊も行わないため、ブナンの動物観は、反省せずに動物を殺生する西洋のそれに似ているようにも見えるが、実際には、けっしてそうではなく、より複雑で、奥行きがある。

ブナン社会における人間の動物に対する態度の最大の特徴は、動物と人間との近接の禁止である。さらに、そのことのベースには、動物は、人間とともに魂をもつ存在であるという考えが横たわっている。動物をあざ笑ったり、動物と戯れたりすることは禁忌であるとされる。人間がそうした近接の禁忌を侵犯すれば、動物の魂が怒つて、天上にいる雷神のもとへと赴く。雷神が怒ると、天候が激変して、災禍がもたらされると考えられている。雷雨、嵐、大水などを含む天候激変にあつては、過去を遡つて、動物と人間との近接の侵犯が探し当てられて、雷神の怒りを鎮めるために祈りが唱えられる。動物の側から言えば、人間によって近接の禁止が犯された場合、動物の魂は怒って、雷神の力を介して、人間に対して仇を討つことになる。

ブナン社会では、一般に、動物と人間は魂をもち、心を有し、思い考える同質的な存在であると考えられている。動物と人間は、互いに互いのことを傷つけたり、干渉したりしてはならない、つまり、動物と人間の近接が禁止されている。そのようなルールは、「伝統的」な日本人のように動物を殺害し、日常的にそれを食べるのだけれども、それに対して、慰霊や感謝を行うという実践の代わりに行われる、ブナンの動物と人間の間を築いている。ブナンは、動物と人間は、互いに近づいてはならないというルールを設けて、人間の動物に対する生殺与奪の行使を、動物の殺害から動物肉の解体料理のプロセスだけに限定したのである。動物と人間の間を日常的に忌避関係を設定することによって、ブナンは、動物と人間の間を方向づけてきた

動物と人間がともに魂をもつことは、ブナン社会では、自然が社会から分断されるのではなく、それと連続していると考えられていることの一端を示している。彼らは、西洋のように、動物と人間の間を断絶（＝非連続性）を設定した上で、一方的に、人間が動物の生殺与奪を統御することはない。動物と人間の間を魂の連続性をベースとしながら、日本のように、人間の動物に対する生殺与奪を宿命として受け入れた上で、動物に対して慰霊や感謝を行うこともない。ブナンは、人間の動物に対する生殺与奪を、狩猟から食事までの過程のなかだけに留める。その上で、天候激変を動物と人間の近接の侵犯に対する雷神の怒りの結果であると捉えるような解決枠組みの助けを借りながら、動物と人間の間を日常的な交わりを遠ざけてきたのである。

動物と人間の間を参照するならば、ブナンにおける自然と社会は、明瞭に切り分けることはできない。ここでは、自然と社会は、緩やかな連続性をもつものとして捉えられている。動物と人間は魂を共有する一方で、交わったり、干渉したりしてはならないものとして関係づけられるからである。それは、動物を殺生することでしか生存できない、人間の動物に対する一つの狩猟民的な態度を示している。

【ブナン、狩猟民、動物と人間、天候の激変、自然と社会】

聖なる動物が解き明かす自然と人間の関係

個性性、日常性、持続性

シンジルト(熊本大学文学部)

本発表は、アムド・チベットに位置する青海省河南蒙旗の事例を中心に、そこで展開する家畜の聖別現象を検証することで、牧畜民社会における自然と人間の関係の輪郭を浮き彫りにしようとする試みである。

人口3万人の河南蒙旗牧畜地域においては、ツェタル牛やツェタル羊と呼ばれる家畜の存在が広くみられる。ツェタル(*tshé thar*)とは、牧畜民(人間)が、自らの世帯の守護神や土地の主を喜ばせるため、ある家畜個体の命や魂を自由にしないし解放することを表すチベット語である。人間は彼ら(家畜)をほふったり、売ったりすることはしない。彼らはツェタル儀礼を受け、首や耳にナヴツァルというリボンをつけ、いわば「聖なる」ものと分別され、家畜というカテゴリーからはみだす聖なる「動物」となる。しかし、聖別されたからといって、彼らの生活が急変するわけでもない。他の家畜からみれば、彼らはそれまで同様、群れの一員に過ぎず、日常どおりにただ生きていくだけである。性別や年齢などの属性を問わず、原則的にあらゆる家畜がツェタル儀礼を受けられる。彼らの聖なる位置づけは、種ではなく、個体としての次元において確立している。ツェタルが老死した場合、各世帯は新しいツェタルを選出する必要があり、ツェタルの持続性が重要である。

ツェタルと類似する立場にいる家畜個体はショグレ(命を買い取ることを意味するチベット語の敬語)である。ショグレが選別される理由は、人間の病気治療のため、家畜の体格がよいこと、毛色がきれいであること、狼に噛まれても死ななかつたためなど多岐に亘っている。またショグレが老死した場合、必ずしも新しいショグレを選ぶ必要がない。そして、ショグレの対象範囲は樹木や市販されている魚類まで拡張する。ただし、ほふらず売らずという意味で、実際には、ショグレのことをツェタルと称するケースもしばしばあり、広い意味で、ツェタルはショグレを包含する。人はいう。ツェタルはショグレであり、ショグレはツェタルではない。

河南蒙旗を包摂する社会主義中国ではかつて家畜の集産化が進められ、無神論的な視点からツェタルは迷信とされ、長年禁止されていた。1980年以降家畜の私有化や信仰の自由が一定程度保障されてから、牧畜民のツェタルが復活してきた。河南蒙旗の牧畜民で家畜の群れの中にツェタルをもたない者はいないと皆が誇り顔で話す。1990年以降経済発展に伴い中国東部において多くの富裕者が生まれ、功德を積むないし贖罪のため、蛇や鱷などの野生動物を買い取り、それらを公園など公共の場に放つという放生(ファンシェン)現象が増えてきた。しかし、それが行き過ぎて結果的に動物虐待や環境問題を引き起こし、貴重動物の密猟に繋がると懸念される。ラトゥールの言葉を借りれば、一種のハイブリッドな様相を呈している。21世紀に入ってから環境保護意識が強まる中、自然と調和の取れたとされる西部の仏教系少数民族の伝統文化が賛美される。そこでさらに、日本の放生(ほうじょう)も視野に入れば、ツェタルはエコロジカルな「東洋思想」の一環などと好意的に解釈されがちだろう。確かに、ツェタルの漢語訳は放生であり、殺生を戒めるという意味で、ツェタルと放生は現象的に類似する。

しかし、牧畜民にとって唯一の生産手段は家畜であり、部分的とはいえ、その使用を放棄するという選択を理解するには別の試みが必要である。これまでの人間と動物の関係をめぐる人類学的な研究蓄積は膨大だが、そのほとんどの強調点は人間集団にとっての特定の動物種がもつ構造的、象徴的な意味に置かれていた。だが、ツェタルは、河南蒙旗とその他の民族集団とを弁別するための指標として起用されたことはない。なぜなら、個体だからだ。また、動物それ自体に両義的な特徴があるため、それが危険視されたり崇拝されたりすることもない。なぜなら、日常的に見慣れた家畜だからだ。そして、フレイザーやエヴァンズ=プリチャードなどが着目した贖罪やそれに伴う供儀的な側面はショグレのなかにみられなくもない。しかし、それは一つの側面にすぎず、とりたてて重要というわけではない。なぜなら、ショグレもツェタルもその命が極限まで持続していくからである。

このように、ツェタルという聖別現象を検討するにあたって、そこでみられた個性性、日常性、持続性に留意することが重要である。これらは、ツェタル実践から直接見出せる三つの特徴であるが、そのいずれも群体(集合)性、非日常性、一過性を意識したうえで行なわれているわけではない。そして聖別の対象は、家畜/野生動物、動物/植物など二項対立的な図式において措定されているわけでもない。したがって、「ハイブリッド」な状況にある放生との比較においていえば、厳密の意味で定義しきれないツェタル(そしてショグレ)のほうが、我々が考える自然と社会の連続性をあらわしているといえよう

人間と魚の連続性

パプアニューギニア・テワダにおけるウナギ漁の事例から

田所聖志（東京大学）

生物や環境を「自然」と捉える私たちの考え方は普遍的なものだろうか。また、異文化の人びとは、生物や環境との関わり方をどのように捉えているのだろうか。

本発表では、パプアニューギニアの農耕民テワダにおけるウナギ漁の民族誌を取りあげ、漁法をめぐる語りから、獲物である魚へも人間性（humanity）が広がられていることを示し、人間と魚とが連続性をもった存在と見なされていることを明らかにする。そして、私たちにとっては、魚は人間をとりまく生態環境の一部である一方、テワダの視点に従えば、魚と人間を切り離し、自然と社会を分断して概念化できないと指摘する。なお、本発表では、人間性という概念を、人間である状態や条件の一部をなす性質という意味で用いる。

現在の人類学には、自然と社会の二元論を再考し、物質としての「自然」と精神のつくる「社会」とが分断されずに互いに関わり合う世界を想定する、動的な視点が生まれている。もともとヨーロッパの近代哲学や科学の発展の基礎は、身体や環境や他の生物から人間の精神を区別し、人間の精神に独自性を与えたことだった。身体や環境や他の生物は「自然」を表象し、精神は「社会」を構成する基質であるとされてきた。レヴィ＝ストロースの論考も、こうした自然と社会の二元論を前提になされている。だが、その後、研究の進展によって、身体と精神の捉え方が文化によって異なることが分かってきた。その結果、「自然」の構成秩序も、文化によって異なると考えられるようになってきた。どの文化でも、身体や環境や他の生物という物質と人間の精神とが、一定の境界線に沿って分断されているわけではない。だからこそ、人間の社会生活を描く動的な視点を発展させる余地が生まれてきた。

人口 620 のテワダの人びとが行うウナギ漁から見える人間 - 魚の関係は、人間と他の生物との関係という点から、こうした視点を検証するのに適した素材である。ウナギ漁は、山間部の村から離れた渓谷の川で行われる。漁法は、川辺に固定させた木の棒に釣糸を縛り付け、釣糸の先にある釣針に餌をつけたうえで一晩放置するというものである。仕掛ける漁場は10カ所程度であり、ウナギの習性や生息から適切な場所が選ばれる。仕掛けるときには呪術がなされる。まず、餌を釣針につけるときに人間の影とウナギの影の別名が唱えられる。ついで、水中に釣針を流すとき、ウナギの別名を口にしながら、餌の所在をウナギに伝える唱えごとが語られる。

人びとによる漁法の解釈は、人間や一部の生物に内在するドゥケ（mt^oke）という存在を基礎とする。魂とも意志とも考えとも訳せる概念であるドゥケは、彼らによると、人間と同様にウナギにも備わっているという。そして、人間が名を呼ばれば振り向くのと同じように、ウナギも名を呼ばれば、それに気づく。ただし、ウナギは、呪術で使われる別名が唱えられなければ、呼びかけを聞くことができない。人びとは、「呪術によって餌の所在を知らせるのである」と語る。ウナギにも人間と同じドゥケがあるという考え方は、神話に表象された魚についての観念と対応している。神話では、男性がウナギに変身し、女性がコイなどの魚に変身したと語られる。ウナギ漁の呪術には、人間と同じドゥケがあるため、魚にも言葉での働きかけが可能であるという考え方が表現されている。

以上の民族誌を、人間と他の生物との関係という視点から捉え直すと次のようになる。テワダの人びとは、魚の世界にも人間が直接関与する経験領域を拡げている。人間の世界と魚の世界を連続した経験領域として結ぶ媒介回路は、習性や生息についての知識に基づく漁場の選択と、漁法に組み込まれた呪術である。漁撈を通じた魚への働きかけという行為の根底には、魚に人間性を認める考え方がある。彼らにとって、人間と魚は、人間性をもち、働きかけが可能であるという点で、連続性をもった存在であり、分断された存在ではない。

魚は、体温が低く、水中に住み、巣も作らないなど、人間と似ておらず、人間の社会の隠喩に使われることも少ないため、魚に人間性や人間との連続性を認めるテワダの事例は、突飛に見えるかもしれない。だが、産業化以前のアイスランドには、神秘的な水の生物を介して、陸に住む人間と魚の世界が結ばれているという観念があったという報告がある。また、テワダの考え方は、南米先住民による、人間と動物とは身体的には不連続である一方で精神は連続するという考え方とも類似する。「自然」は文化によって規定されており、生物や環境への働きかけも文化的に組織化されている。テワダについていえば、生息環境や見かけの確たる違いの一方で、人間のもつ人間性は魚にも広がられている。ここでは、自然と社会は分断されておらず、自然と社会は関わり合いながら構成されていると捉えられるだろう。